

令和2年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
中学校の部 最優秀賞



Think globally. Act locally.

只見町立只見中学校
3年 大川 桃果

「只見町の森林はとてもきれいですね。キリバスの海面上昇を抑えることにもつながっているのです、とてもありがたいです。」

これは、日本キリバス協会のケンタロ・オノさんが、只見町の自然をご覧になっておっしゃった言葉だ。私はこの言葉を忘れることができない。なぜなら、危機的な状況にある世界の環境を、とても穏やかな表情で教えてくださったからだ。

オノさんは昨年秋、私たちが通う只見中学校にいらっしゃった。オノさんは、海面の上昇によって危機に瀕している国、キリバスに住んでいた。訪問の際、オノさんは講演で私たちにキリバスを紹介してくださった。最初はさまざまなキリバスの文化の話をしてくださったので、私は「とても楽しそうな国で、いい国だな」と思っていた。しかし、後半になると、雰囲気ががらっと変わった。そのとき見たのは、島に波が押し寄せ、今にも沈んでしまいそうなキリバスの映像だった。その後のオノさんの説明によると、前半の映像は「過去の」キリバスであり、後半の映像は「今の」キリバスだった。この話を聞いたとき、私は初めて「地球温暖化の影響」を強く実感した。

この経験をきっかけにして、私たちの学年は地球や世界が直面している様々な問題について興味を持った。調べていくと、世界は今、数多くの問題を抱えていることが分かった。例えば、人種差別、経済格差、戦争、異常気象、海洋汚染、男女の不平等など、挙げればキリがないほどである。

ところで、皆さんはSDGsというものをご存じだろうか。SDGsとは、2015年9月の国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標であり、その目標は大きく分けて17個ある。国連では、2030年までにそれらを達成させることで、先に挙げた数多くの問題を解決し、世界を未来につなげようとしているのである。

私たちはこのSDGsをもっと多くの人々が学ぶべきだと思う。そして、世界に生きるすべての人々が問題意識、危機意識を持ってできることから始めなければならないと思う。では、私たちが世界を未来につなげるためにできることはどのようなことなのだろうか。

ここで、私が通う只見中学校の実践を紹介したい。只見中学校ではSDGsの目標の一つ、「海の豊かさを守ろう」に着目して、海洋学習というものに取り組んでいる。そのきっかけは、今年の夏に私たちの学年が新潟の海へ行き、海洋のごみを拾う活動を経験した

ことだった。実際にごみを拾ってみると、最も多かったのはプラスチックのごみで、大きさや種類も様々だった。驚いたことに、ごみの中には近隣の国で作られたものもあった。

この活動をきっかけとして、只見町は東京大学で昨年度の冬に開催された全国海洋サミットに参加することになり、私たちはサミットへの参加に向け、さらに海洋のことを学習した。そして、多くの現実を知った。

例えば、太平洋に流れ出たごみがメキシコの国土面積と変わらない大きさのゴミベルトを形成していること、人々の生活排水や工業排水によっても汚染が進んでいること、そして2050年には海洋ごみが魚の数を上回ってしまうだろうという予測があること。これらを知ったとき、私たちは海洋汚染を食い止めるためにできることは何かを考えた。

現在、只見中学校では「できること」として二つの活動を行っている。

一つ目は、読まなくなった新聞紙を使って新聞エコバッグを作る、というものだ。これは生活の中で出るごみを減らせば、海洋汚染を遅らせることができるだろうという考えのもと、プラスチック製のレジ袋の利用を減らす取組として始まった。新潟で拾ったごみでもレジ袋が多かったこと、日本で今年の7月からレジ袋が有料になった理由からも、レジ袋は我々の生活で頻繁に出るごみだということがわかる。初めは私たちの学年だけで作っていたが、今では学校全体で作り、町内のお店に置いていただいている。また、町内の人に私たち中学生が作り方を教える講習会も今年の夏に町内各地で行い、私たちの活動を広げる取組もしている。そのかいあって、町内で新聞エコバッグを作る人が少しずつ増えており、作っていただいたエコバッグが学校に届くことも度々ある。

二つ目は、木製バッジ作りだ。これはSDGsの取組をより多くの人に知ってもらうために2年生が手作業で作っている。バッジはSDGsの17の目標を表す17色が輪を描く形でデザインされている。材料の木は、今後只見町の資源であるブナの間伐材を用い、SDGsの目標の一つである「陸の豊かさを守ろう」を広げていく予定だ。

この他にも、新聞やニュース、ラジオなどのメディアでこれらの活動を取り上げていただき、県内外に発信してきた。時折、私たちの活動を知った方から励ましのお手紙が届くこともある。

これらの活動を経験して、みんなに考えてほしいと思うことが二つある。

まず一つ目は「知る」ことだ。私たちの活動のきっかけは、新潟でのごみ拾いをしたことだ。それを通して、私たちは世界的な問題が身近な所まで迫っていたことを実感した。その気づきによって、海洋ごみによって海に生きる生物たちの命が危険にさらされていること、今この瞬間にもキリバスのように大変な状況の国があること、世界を未来につなぐためのSDGsのことを学び、知ることができた。そして、このような危機的な状況から少しでもいい方向に変えていきたいと私たちは行動を起こした。つまり、知ることが行動を起こすための第一歩なのだ。今を生きる人々は今の世界の現実を知るべきだと思う。

二つ目は「できることをやる」ということだ。現在、世界では新型コロナウイルスの影響で「新しい生活様式」へと生活の在り方が変わってきている。これは見方を変えれば、自分たちの行動を変えるチャンスだ。だからこそ、節電やごみの分別、資源の再利用など、小さなことでも、すぐにできる取組を誰もが意識するようになってほしい。

世界の問題について多くの人を知り、身の回りのできることから行動するようになっていけば、一人一人の小さな力は大きな問題を解決する大きな一歩になり、国と国、世界と海が1つになれるかもしれない。私たちはそう信じて、これからも行動し続けていく。

「Think globally. Act locally.」